

## メディアビジネス部門と環境企画

2020年11月に英国北部グラスゴーで開催予定であった第26回国連気候変動枠組み条約締約国会議(COP26)が、新型コロナウイルスの感染拡大の影響で21年に延期されました。エスピノーザ条約事務局長は「新型コロナウイルスは最も緊急な脅威だが、気候変動が長期的な最大の脅威であることを忘れてはならない」として各国に温暖化対策の強化も求めています。

新型コロナウイルスのパンデミックの影響により、世界経済が停滞したため温室効果ガスの排出量が大幅に削減される見通しですが、コロナ禍が収まると、反動が出る恐れがあります。

在宅勤務の増加など、コロナ対策で生まれた新しい生活様式がしばらく続く可能性はありますが、気候危機対策としては持続可能とは言えません。

メディアビジネス部門では、編集特集や広告特集にイベントやデジタル展開などを加えた立体的な連携によって、こうした環境に関する社会変化や企業の取り組みを読者に訴えていく環境コミュニケーションに力を入れています。大型企画はもとより、読者にとって身近なものをテーマにした事例まで、様々な取り組みを報告します。

### ◆環境教育プロジェクト「地球教室2019」

「地球教室」は新聞社が持つ機能や情報を環境教育という観点から学校現場に生かそうと企画し、創刊130周年記念事業として2008年にスタートしました。12年目を迎える19年は、環境問題を体系的に解説した基礎編と、協賛企業などの環境技術や取り組みをまとめた応用・研究編からなるオリジナル環境テキストを無料で配布。これまでの取り組みの積み重ねによる認知度の向上もあり、全国の小学校、環境団体から26万部の応募がありました。小学生に絶大な人気を誇る「科学漫画サバイバルシリーズ」(朝日新聞出版)と前年度からコラボレーションし、小学生の興味関心を引く仕掛けを施しました。

また、親子を対象とした「かんきょう1日学校」を9月22日に開催、朝日新聞記者と協賛企業が講師を務める合同出張授業には約500校からの応募があり、全国9校(うち、1校はオプション企画追加)で実施する運びとなりました。子どもたちの環境に対する思いが伝わった「かんきょう新聞」コンクールには、約7000通の作品が寄せられています。

20年度も、教育関連組織との連携をより強め、教育現場からの要望に応じていきます。





(特別協賛:旭化成株式会社、株式会社ロッテ、ナブテスコ株式会社、株式会社 UACJ、後援:文部科学省、環境省)

### ◆旭硝子財団「朝日地球会議2019」採録

当財団は、次の時代を拓くための研究等への助成や、優れた人材への奨学助成、地球環境問題の解決に大きく貢献した個人や組織に対する顕彰等を通じて、人類が真の豊かさを享受できる社会および文明の創造に寄与しています。

「朝日地球会議2019」では“地球環境問題の悪化に伴う人類存続の危機の程度をどのように感じているか”を時計の針にたとえて表示した「環境危機時計」を通じて、環境危機を生活者意識からどう乗り越えられるかをパネルディスカッションで発信、警鐘を鳴らしました。また、毎年地球環境問題の解決に大きく貢献した個人や組織に対して、その業績をたたえて贈られるブループラネット賞受賞者からの環境問題へのメッセージも掲載し、読者に地球環境の未来について考えるきっかけをお届けしています。



(協賛:旭硝子財団)

### ◆東京都 海ごみ発生抑制に向けた広報業務

東京都の海洋プラスチックごみ問題に対する普及啓発業務の企画競争に参加し、受託。都民ひとりひとりがこの問題を自分事化し、プラスチックの使い方を見直すきっかけとなるような動画を作成しました。世界的アニメーターである伊藤有壺氏が手掛けた「空飛ぶクジラ」のクリエイアニメと、東京の海・川・空の空撮映像を合成し、インパクトのある動画に仕上げました。また、交通広告や新聞・自社のウェブメディア (telling、GLOBE+、朝日新聞DIALOG、bouncy) を活用して動画の拡散を行い、ビジネスパーソン、ミレニアル世代の女性、大学生等、多様なターゲットへ、「Re-Think海ごみ」と呼びかけました (<https://www.youtube.com/watch?v=Lj7BvEZwxTk>)。



(委託:東京都)

◆「Guessイイ(下水イイ)!!」プロジェクト (下水道から考える未来の防災プロジェクト)

私たちの生活を支えるインフラ、下水道の重要性を若者に伝えようと、明電舎、東亜グラウト工業と朝日新聞DIALOGは「Guessイイ(下水イイ)!!プロジェクト」を立ち上げました。「Guess」の「推測する」という意味を「下水」とかけ、下水道に思いをはせてほしいという願いを込めました。

2019年12月、DIALOGチームの大学生と両社社員が東京本社でセッションを開催。気候変動の影響とされる近年の豪雨により、下水管の雨水処理能力を超えて市街地に水があふれる「内水氾濫」の実態などを学びました。

セッションを経て大学生が授業案を作成し、20年2月に東京都立総合工科高校で特別出前授業を実施。下水道の防災機能や下水管の老朽化などの課題を学んだ生徒たちは、下水道への社会的関心を高めるアイデアを班ごとに発表しました。

協賛2社は「賛同企業をさらに募り、プロジェクトを進化・拡大させたい」と話しており、今後も下水道の大切さを伝える機会をともにつくっていきます。

(協賛:明電舎・東亜グラウト工業)



◆MS&ADインシュアランス グループ 「SDGsの取り組み」訴求企画

MS&ADインシュアランス グループは、国連環境計画・金融イニシアティブが提唱する「自然資本宣言」に署名している企業です。本広告では、環境保全がCSRではなく、「経営戦略上の中心課題」と捉える「自然資本」の考え方を紹介し、自社の取り組みとして、自然環境に対して企業活動が与える影響額を概算評価するサービスや、損害保険を通じた再生可能エネルギー事業の支援、防災・減災のコンサルティング事業などを発信しました。

今回は、通常の記事下広告ではなく、朝日新聞社の一大イベントである「朝日地球会議」において、まさに「自然資本」の臨界点到達に警鐘を鳴らす著名な環境学者のヨハン・ロックストローム博士とキャスターの国谷裕子氏の対談を採録した特集記事の下で掲載したことにより、記事内容と広告内容の親和性を生み出すことができました。

結果、広告上で同時に告知したMS&ADインシュアランス グループ主催の「Eco-DRR (生態系を活用した防災減災)」をテーマにしたシンポジウムへの参加申し込み増にも大きく寄与したとのこと。

(協賛:MS&ADインシュアランス グループ)



◆「おしえて 林先生！」企画

6月5日の「世界環境デー」に合わせて、昨今問題になっている海洋プラスチックごみの話題を切り口に、身の回りのできる環境活動として三つのR(リデュース、リユース、リサイクル)を取り上げて林修先生が解説しました。その3Rに、日々の買い物時にマイバッグを持参することで、レジ袋などのプラスチックごみを減らすことができる等の「リフューズ」を加えた4Rの概念があり、1991年から「買物袋持参運動」を展開しているイオングループの環境配慮型素材を使用した取り組みを紹介しました。

林修先生のわかりやすい解説とともに、日常での環境活動への取り組みに関して、幅広い世代により身近なものとして関心を持ってもらえる紙面となりました。



(協賛:イオン)